

# 神話の時空と異界

戸 谷 高 明

神話は〈神話の時間〉によつて組み立てられているといつてよいであろう。それ故、いわゆる〈歴史の時間〉とは区別して扱わなければならない。古事記に即していうならば、上巻の天地開闢―国生み―天孫降臨―日向三代へと続く神々が行動する時間と、中巻以降の皇代（天皇の時代）の時間とは、〈神話の時間〉から〈歴史の時間〉への転換として認めることができる。古事記中巻は神と人の物語といわれているように、神が登場しても託宣や夢や卜占を通して間接的にあらわれ、主体はあくまでも神を離れた人間で、人間の側から出来事が語られる。

古事記・日本書紀ともに神話は日向三代で終幕となる。古事記では、天孫ニギノミコトとコノハナサクヤビメとの間から生まれたホヤリノミコト（山幸彦）は海神の娘トヨタマビメとの間にウガヤフキアヘズノミコトを生む。こ

のウガヤフキアヘズノミコトは姨のタマヨリビメとの間に四柱の御子を生む。

是天津日高日子波限建鸕草葺不合命、娶其姨玉依毘売命、生御子名、五瀬命。次、稻氷命。次、御毛沼命。次、若御毛沼命、亦名、豊御毛沼命、亦名、神倭伊波礼毘古命。<sup>四</sup>

故、御毛沼命者、跳浪穗渡坐于常世国、稻氷命者、为妣国、入坐海原也。

日本書紀第十一段には、本文・一書第一―第四の五つの異伝がみられる。

彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊、以其姨玉依姬为妃、生彦五瀬命。次、稻飯命。次、三毛入野命。次神日本磐余彦尊。凡生四男。久之彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊、崩於西洲之宫。因葬日向吾平山上陵。

紀				記	出生順
一書四	一書三	一書二	本文		
彦五瀨命	彦五瀨命	五瀨命	彦五瀨命	五瀨命	1
磐余彦火出見尊	稻飯命	三毛野命	稻飯命	稻水命	2
彦稻飯命	神日本磐余彦火出見尊	稻飯命	三毛入野命	御毛沼命	3
三毛入野命	稚三毛野命	磐余彦尊	狹野尊	若御毛沼命	4
		神日本磐余彦尊	神日本磐余彦尊	豊御毛沼命 神倭伊波礼毘古命	4の亦名

一書（第一）曰、先生彦五瀨命。次、稻飯命。次、三毛入野命。次、狹野尊。亦号神日本磐余彦尊。所稱狹野者、是年少時之号也。後撥平天下、奄有八洲。故復加号、曰神日本磐余彦尊。一書（第二）曰、先生五瀨命。次、三毛野命。次、稻飯命。次、磐余彦尊。亦号神日本磐余彦火出見尊。一書（第三）曰、先生彦五瀨命。次、稻飯命。次、神日本磐余彦火出見尊。次、稚三毛野命。一書（第四）曰、先生彦五瀨命。次、磐余彦火出見尊。次、彦稻飯命。次、三毛入野命。

出生順や神名に若干の異伝がみられるが、第一子が（ヒコ）イツセ、第四子がカムヤマトイワレビコ（但し、一書

の第三・四は違う）であることが基本になっている。表で示すと次のごとくである。

ところで、神話を閉じるにあたり、四柱の御子の去就はどのように語られているであろうか。

古事記は、「御毛沼命者、跳浪穗渡坐于常世国、稻水命者、為妣国而、入坐海原也」と書いている。第三子のミケヌと第二子のイナヒはそれぞれ神話の空間である常世国、妣国である海原に姿を消す。第一子のイツセと第四子のワカミケヌは現実の空間にとどまって大和に向けて行動する（中巻の神武東征の物語に入る）。

日本書紀はどうか。先の引用文にみるように、神代紀の最終段である第十一段は、四柱の御子の名を列挙するだけで、神話的異界に赴いた二柱の御子の記述はみられない。

卷第三、神武即位前紀甲寅年十月の条に、

其の年（注・太歳甲寅）の冬十月の丁巳の朔にして辛酉に、天皇、親ら諸皇子・舟師を帥東を征ちたまふ。

とあるように、四柱の御子が一緒に東征したというのが書紀の構成で、明らかに古事記とは異なる。二柱の御子が神話的異界に赴いたとする古事記の意図については後程述べることになしたい。

〈神話の時間〉は、〈歴史的時間〉の延長線上に存在する時間ではない。人間の時代はどこまで溯っても神の時代に接続することはあり得ない。本居宣長は、「上ツ代の人」は、凡て皆神なりし故に、然言へり」と述べ、人間が神であつた時代を想定している。しかし、これは宣長流の論法で、神話時代の時間が歴史時代の時間と連結することがあり得ないことからいえば、西郷信綱氏のいうように、神話の時間は「無時間性という独特の時間」（「古事記の世界」といえようか。

古事記の時間は、「天地初発之時」とあるこの冒頭の「時」からはじまるといつてよいであろう。この時は、古事記神話の始まる「時」であり、神話的時間の始源を示す「時」でもある。この始源の「時」に高天原に成つた神がアメノミナカヌシ・タカミムスヒ・カムムスヒ三神であり、

この三神を含む「別天神」や「神世七代」の神々の物語を経て、日向三代にいたる。古事記の時間表現には、三年、八年、八日八夜などがみられるが、いずれも聖数觀念や淹留話の基本年数にかかわるものといつてよい。例えば、ホヲリノミコト（山幸彦）の海宮訪問神話にみられるように、海宮の三年は地上の三年と同時進行の時間で、神話の時間と異界の時間とを区別する意図はみられない。同じ異界訪問であつても浦嶋子の場合は地上の時間と龍宮の時間との違いを設定することによつて、説話化の道を拓いたといえよう。

上巻末尾の、

故、日子穗々手見命者、坐高千穗宮伍佰捌拾歳。御陵者、即在高千穗山之西也。

とあるホホデミの年令記述も神話の時間表現として解すべき数字であるが、神話と歴史の接合点に置かれた帝紀的数字とみられなくもない。

日本書紀は、卷第三神武即位前紀の冒頭で、

故、蒙以養正、治此西偏。皇祖皇考、乃神乃聖、積慶重暉、多歷年所。自天祖降跡以逮、于今一百七十九万二千四百七十餘歳。

と、天孫降臨から神武天皇にいたる年数をこのように記している。これは、神代の時間を歴史的時間觀念によつてあ

らわそうとしたことによるが、実際にはその数字が示しているように、神代を遠い過去に位置付けるための作為である。宣長は古事記伝で、「伍佰捌拾歳」は、「凡て神代の年ノ數の事、(今これをかにかくに論はむは、中々にいまだしき事に思ふ人あれど、然らず。此にも如此見え、書紀にも見えれば、必スなほざりにすくすべきにあらざ)」と述べ、さらに書紀の「一百七十九万二千四百七十餘歳とあるは、三御代(中略)の總ての年ノ數なり。(此ノ年ノ數の、いみじく多く久しきを、近き世の、なまさかしき人の心には、信られぬことに思ふから、種々の説あれども、皆漢意のさかしらなり。ただ古ヘノ傳へのまゝに心得べし)」「(神代一之卷)といい、この数を三代に三分すると約六十万歳で、(五百八十歳)はこれより短いとまで述べている。

古事記神話の時間はさきに述べたように、すでに「天地初発之時」に始まっているのに、天孫降臨から起算しているのは、編年体の歴史書を意図した日本書紀にとつて、それが虚構の数字であろうとも、歴史的時間の延長線上に天皇政治の原点を求めたことによるであろう。

神話の(時間)を縦軸とすると、横軸に(空間)がある。神話の(空間)とは神々の行動圏といつてよい。その行動圏は二つに大別することができるであろう。一つは観念上

の神話的空間、いわゆる異次元の空間で、高天原・黄泉国・根国(根之堅州国)・常世国・海原(海神の国)などである。もう一つは実存する地理的空間で、国生み神話の本州(西日本を中心とする)・四国・九州・隠岐・対馬などの諸島、国作り神話の山間山・美保崎、国譲り神話のイナサの小浜や信濃の諏訪、日向神話の高千穂・カササの岬などである。これらの地理的空間と異なる世界として観念化された空間が次元を異にする虚構の世界で、これを指して他界・異界・異郷などという。類義の漢語表現として、このほか、他郷(竟)・他国・他邦・異域・異国・異境・異邦などをあげることができるが、漢語本来の意味はよそにくにや土地や地方の意(故郷から離れた別の土地)で、観念上の別の世界を指したのではない。(異界)とは、文字通り(異なる空間の世界)で、実際には存在しない空間をいう。

異界についての研究は、詳細かつ複雑化し、多くの成果をあげているが、決め手を欠く議論になつてきていることも一部に認められる。異界研究の基礎資料が古事記・日本書紀などの叙述にあることはいうまでもない。

「天地初発之時」、三神が生成した世界として(高天原)があらわれる。最初に登場する(高天原)は(天地)の間

というよりは〈天〉の側に属する世界である。異界は觀念上の世界であるため、その位置を明確になし得ない面も少なくないが、〈高天原〉は天皇家の祖先にあたる〈天つ神〉の住む世界として設定された觀念的信仰的空間で、古事記神話はこの〈高天原〉を起点として展開する。

宣長は〈高天原〉を天上に実存する空間と考え、「天ツ神の坐シます御國なるが故に、山川本草のたぐひ、宮のほか万ツの物も事も、全御孫ノ命の所知看此ノ御國土の如く」(神代四之卷)であるとして、地上の国土と同様の世界が天上に存在すると考えていたらしい。西郷氏は、『古事記注釈』で〈高天原〉を天ツ神の居られる天であるとする宣長の解釈を評価した上で、「この土地の王権の正統性が神話的にそこに由来すると考えられた天上の他界」であるといわれる。地上の葦原中国側に視点を置けば、〈高天原〉も他界に属するであろう。古代人の心の中に〈高天原〉なる「天上の他界」が存在したとする見方が穩当のように思われるが、この觀念が古代人のどの範圍に及ぶものであったかは不明である。一般的な信仰のように、民衆の間に広く根を下ろしていたと考えるよりも、その時代の支配者層、知識層に限られた特殊な觀念であったとすべきであろう。

〈高天原〉は、すでに指摘されているように地上の国(葦原中国)との対応関係の中に出現するだけで、他の世

界と交流することはない。煩をいとわずその主な内容を略記すると次のようである。

- ① 神話の冒頭、〈高天原〉に生成した三神、神世七代を経て、キ・ミ二神は国土の修理固成を命じられ、オノゴロ島に「天降」り、国を生み、神を生む。
- ② 三貴子の分治により、アマテラスが〈高天原〉の主神となる。
- ③ スサノヲはアマテラスのいる「天」に参上するが、その時「山川悉動、国土皆震」とある。
- ④ アマテラスとスサノヲがウケヒをした天安河、アマテラスの隠った天の石屋戸も〈高天原〉にあった。アマテラスが石屋戸に隠ると、「天原自闇、亦葦原中国皆闇」く、出現すると「高天原及葦原中国自得照明」とある。
- ⑤ アマテラスは、アメノオシホミミを、豊葦原水穗国を知らしめるために、「天降」されようとしたが、葦原中国は荒ぶる国ツ神が多かったため、アメノホヒやアメワカヒコやタケミカツチを〈高天原〉から国譲りの交渉役として派遣する。
- ⑥ タケミカツチによる国譲りの交渉が成立し、天孫の「天降」となる。その途中、「上光ニ高天原、下光ニ葦原中国」して出迎えたサルタヒコが道案内をする。

⑦鏡をアマテラスのみ魂として伊勢のイスズの宮に齋き祭る。

以上が、〈高天原〉にかかわる主な内容であるが、天上の〈高天原〉と地上の〈葦原中国〉とは〈天降〉〈昇天〉という関係で対応する。一方、イザナキの黄泉国訪問、スサノヲのラロチ退治、オホクニヌシの根ノ国訪問などは〈高天原〉と直接かかわらない。

〈高天原〉と〈葦原中国〉との位置関係は文中の叙述によっても疑う余地はないが、〈葦原中国〉と〈黄泉国〉や〈根ノ堅州国〉などとの位置関係については必ずしも解釈の一致をみていない。端的にいえば、上下（垂直）か横並び（水平）かということである。中でも議論の中心は〈黄泉国〉である。「黄泉」は和語ヨミの漢訳語とみられるが、問題は和語ヨミの語義はどのような世界をあらわしたものが、それに当たる漢語として用いられた「黄泉」をどのように理解したかということである。

火の神を生んだことよって神避つたイザナミについて、故、其所<sub>レ</sub>神避<sub>ニ</sub>之伊耶那美神者、葬<sub>レ</sub>出雲国与<sub>ニ</sub>伯伎国<sub>ニ</sub> 埜比婆之山<sub>上</sub>也。

という記述がある。また黄泉国訪問神話の末尾に、故、其所<sub>レ</sub>謂黄泉比良坂者、今、謂<sub>ニ</sub>出雲国之伊賦夜坂<sub>ニ</sub> 也。

とある。この「故、其<sub>レ</sub>也」という注記的記述は、出雲が〈黄泉国〉と接している地であるという考えがあったことによるものと思われるが、死者の国を出雲国に比定することによって、〈黄泉国〉という神話の觀念的空間と現実の地理的空間とを繋ごうとする意図が働いたものとみることもできよう（なお、日本書紀第五段一書第五は、「故、紀伊国の熊野の有馬村に葬りまつる」という異伝をのせる）。〈黄泉国〉とは、どのようにイメーじされた異界であったか。当然のことながら、古事記や日本書紀の本文の読みからはじめなければならぬ。

ヨミの国から逃げ帰つたイザナキが「伊那志許米上志許米岐穢国」にあつたことだといひ、「穢繁国」にいたつた時の「汚垢」などといつていっているように、ヨミの国は醜いのがれの甚だしい国であつたという。古事記に近い所伝である日本書紀第五段一書第六に、

伊奘諾尊既還、乃追悔之曰、吾前到<sub>ニ</sub>於不須也凶目汚穢之処<sub>ニ</sub>。故当<sub>レ</sub>滌<sub>ニ</sub>去吾身之濁穢<sub>ニ</sub>、則往<sub>ニ</sub>至筑紫日向小戸橋之憶原<sub>ニ</sub>、而祓除焉。遂将<sub>レ</sub>盪<sub>ニ</sub>滌身之所<sub>ニ</sub>汚<sub>ニ</sub>、乃興言曰、（以下、省略）。

とあり、一書第十にも、

是時菊理媛神亦有<sub>ニ</sub>白事<sub>ニ</sub>。伊奘諾尊聞而善之、乃散去矣。但親見<sub>ニ</sub>泉国<sub>ニ</sub>。是既不祥。故欲<sub>レ</sub>濯<sub>ニ</sub>除其穢惡<sub>ニ</sub>、

乃往見粟門及速吸名門<sup>二</sup>。然此二門、潮既太急。故還<sup>二</sup>向於橘之小門<sup>一</sup>、而弘濯也。

とある。これらによれば、死者の国は汚くけがれたところであるという觀念が存在したことは動かし難い。黄泉国訪問—みそぎ—三貴子誕生という筋書からいえば、へみそぎの前提として黄泉国がけがれた醜いところであることが必要条件であったといえなくもない。だが、イザナミの死体に「宇土多加礼許呂々岐」ていたとか、その死体の各部位に雷が成っていたとか、それをみてイザナキが逃げ還る時ヨモツシコメや八種の雷神に千五百の軍勢を副えて追わしめたという叙述は、死者の世界を恐怖の空間として觀念していたことを物語っているよう。死んだアメワカヒコに誤られたアヂシキタカヒコネが「何とかも吾を穢き死人に比ふる」といつて怒ったという話がある。日本書紀がこのことを「世人<sup>いひ</sup>生るを以ちて死<sup>しに</sup>に誤つことを惡む。此其縁<sup>えん</sup>なり」(第九段本文)と注記しているのは、民間において死人を忌みきらっていたことのあらわれで、このような心意がヨミの国のイメージ形成の一因になったものと思われる。

汚れと恐れの世界として描かれているヨミの国は、明暗いずれであったか解釈が分かれている。

記伝は、「死<sup>シ</sup>し人の往<sup>ユキ</sup>て居國<sup>ブル</sup>なり」といい、「下<sup>シモ</sup>ノ文<sup>コトバ</sup>に燭<sup>ヒト</sup>一<sup>ト</sup>火<sup>ヒ</sup>とあれば、暗處<sup>クラトコロ</sup>と見え、(中略)下方<sup>シタヘ</sup>に在<sup>シ</sup>ル國<sup>クニ</sup>なり

けり」(神代四之卷)といっている。

ヨミの国を訪れたイザナキが「一つ火を燭して」イザナミの死体を見たという記述が、この国が暗黒であったとする根拠になっている。しかし、これについて異論を唱える佐藤正英氏は、「殿の内に入つて」とあるところから、「光のない暗闇だったのは、イザナミの命が入つたままなかなか出て来なかつた宮殿の内でのことで」、「黄泉国そのものが光りのない暗黒であることを意味しはしない」といわれる。ヨミの国を横穴式古墳に比定して、〈殿〉<sup>二</sup>〈玄室〉<sup>一</sup><sup>二</sup>〈黒闇〉<sup>一</sup>という解釈をとらず、「俗世とそれほど変らない明るさの世界として語られているとみる」のである(「黄泉国の在りか—『古事記』の神話をめぐって」現代思想10—2、昭和57年9月)。日本書紀の第五段一書第十は、二神が言葉を交わした後、「言<sup>コト</sup>訖<sup>ハシ</sup>りて忽然<sup>まづち</sup>に見えず。時に聞<sup>ク</sup>し。」とあり、記伝が「初<sup>ハジメ</sup>に出向<sup>イデム</sup>へたまへりし時は、姑<sup>ハハ</sup>ク頭國<sup>ウツクニ</sup>に坐<sup>マシ</sup>し世の御形<sup>ミカタ</sup>になりて、見え賜<sup>たま</sup>ひしなり」(神代四之卷)といっているのは、会話する場面は明るい空間であったが、急転して暗黒に変じたという書紀一書と同じであろう。イザナキを殿のサシ戸で出迎えた時のイザナミは醜い姿でなかつたというのが宣長の読みであるが、述作者がそこまで意を尽くしていたとは思われない。

この話には生死の起源も語られているが、主眼はへ見る

な)の禁を侵したために、ヨミの国から逃げ還り、ミソギの果てに三貴子を産み、アマテラスが(高天原)の主宰神となり、皇室の祖先になるということになったとみるべきであろう。

ヨミの国のイメージ化の過程で、死者を葬る墳墓や「殯斂」の知識・経験などが念頭にあったものと推測され、それは庶民が死者の行く世界として幻想していたものとは必ずしも一致しないであろう。

ヨミを闇にもとづく語で、ヤミの母韻交替形とし、暗黒な世界とする説は、地下に死者の住む空間があったとする。これは周知のように、三層構造による世界観を想定したものである。高天原―葦原中国―黄泉国という、垂直的な構成である。宣長は、祝詞鎮火祭に、イザナミが「吾は下つ国を知らむ」と(黄泉国)を「下つ国」といつていることなどを根拠にして地下説を唱え、これが大方の支持を得てきた。ところが近年、佐藤氏が、「黄泉比良坂之坂本」の解釈をめぐって、「坂本は坂上に対する語」で「黄泉比良坂は、けわしくきりたった山坂として黄泉国に通じており」と発言し、それを根拠として(黄泉国)は「山にあるところの他界なのではあるまいか」という、山上他界説を提出した。神野志隆光氏はこれを受けて、「その坂を下った側が葦原中国、坂の向こうが黄泉国、ということにな

る」(葦原中国も、黄泉国も同じ地上世界である。)(新編全集「古事記」としてヨミの国地下説を否定する。「坂本」という表現は景行記に「足柄之坂本」とある一例のみである。また(坂上)という表現がよくみられるのに(坂下)という例がないことから推量して、(坂本)を(坂下)に相当するものと解してよいであろう。しかし、古事記には山から下る坂か、地上に出る坂か、急坂か、なだらかな坂か、具体的なイメージを示す表現はみられない。スサノヲがオホアナムヂを「黄泉比良坂」まで追ってきたという同一表現においても、具体的な地形表現はない。

神々の住む空間として天上に(高天原)なる世界をイメージしたのと同じように、死者の行く空間をイメージしたのが(黄泉国)である。地上の葦原中国との位置関係についてはみてきた通りであるが、西條勉氏は「ヨモ(ヨミ)は原義的には山を意味した」、「和語のヨモ(ヨミ)が漢語「黄泉」で捉えられたとき、死者の世界は、もともとの山中から地下の方に移し換えられたのだ」と説いている。山中他界の表現であったヨミ(モ)を漢語「黄泉」に翻訳することによって和語のもつイメージを消し去ろうと「作為」したのではないかと新しい視点からの解釈である。この説の前提は、ヨモ(ミ)の原義がヤマ(山)の交替形であり、漢語「黄泉」が地下他界の観念をあらわしたものと



であるということである。神野志氏は、「ヨミ(ヨモ)に山の意味を認めて、『黄泉国』を山中世界とする説には、やはり消極的にならざるをえない。」「(古事記の世界観)とする。

周知のように、「黄泉」という表現は古事記に限られたものではない。

ヨモ(ミ)は、豫母都志許壳(記)・余母都比羅佐可(紀、第五段一書第七訓注)のように一字一音の表記例もあるが、古事記は黄泉国・黄泉戸喫・黄泉比良坂・黄泉大神など「黄泉」、日本書紀は一書第六に「黄泉」の用例があるが、そのほかは泉津醜女・泉津平坂・泉津日狭女・泉門塞之大神(以上一書第六)、滄泉之竈・泉津平坂(以上一書第七)、泉平坂・泉津事解之男・泉国・泉守道者(以上一書第十)のように「泉」一字による表記が多い。漢語意識の相違がこのような結果になったものと思われるが、「泉」も地下の黄泉・九泉・泉下の意で、死後に人の行くところをいう。辞書的説明をすれば、梅堯臣の「唯人帰泉下、万古知己矣」(書哀)や同じ作者の「沈埋向九泉」(悼亡)など死後行く地下の深い世界を意味している。日本書紀孝徳天皇大化五年三月の条に「黄泉」、出雲国風土記の「黄泉之坂・黄泉之穴」(出雲郡宇賀郷)、万葉集の「黄泉の使」(5905―憶良)・「遠つ国黄泉の界」(9

一八〇四―福麻呂)・「ししくしろ黄泉に待たむと」(9一八〇九―虫麻呂)など、いずれも死後の世界を「黄泉」と書いている。当代の知識人が和語のヨモ(ミ)に通底する漢語表現として「黄泉」を採用したものとみられる。中村啓信氏は、中国文献の「黄泉」を検討して、古事記の「黄泉」の話は単なる地下や泉や墓そのものの表現でもなく、また暗黒の世界とも一般に死者の行くところともいえない「文化複合に成る固有な説話」であるといわれる。「黄泉」について、『古事記の本性』所収。なお『文選』卷第二十九「古詩十九首」にも「潜かに黄泉の下に寝ね千載永く寤めず」とある。

葦原中国と異界との間には「黄泉の界」「海坂」といわれるサカヒがあると観念されていた。古事記の「黄泉比良坂」と同じである。ヒラと音仮名で表記されているこの語が和語であることを示している。難解な語であることは従来の解釈が証明している。最近の新編全集の注をみると、「古事記」は、

「ひら」は崖の意。黄泉国と葦原中国とを隔てる切り立った坂。

『日本書紀』は、  
黄泉国と現国との境界にある坂。ヒラは境界の意。そこが坂になったのでヒラ坂という。縁辺の交替形とも

いう。

と説明している。沖縄県の方言で「上り坂」をピラというのに因むとする説がよく知られているが、後者のへり説は井手至氏の解釈による。宣長は「平坂」と云は、平易なる意なり。」といっている。

日本書紀では、さきの資料にみられたように、泉津平坂（一書第六・第七）・泉平坂（一書第十）のようにヒラに「平」の字を当てて書いている。祝詞鎮火祭「与美津枚坂」、播磨国風土記「枚野里」には「枚」とある。表記字の「平」「枚」は平瓮・枚次（平たい杯）を引くまでもなく平らの意。和語ヒラに漢語「平」を当てて表記した経緯は知るすべもないが、坂の形状（例えば、斜面の表面が「平ら」であるとか）にかかわる用字であると考える方が自然であろう。

この「黄泉比良坂」は「根国」に続く坂としてもあらわれる。ヨミの国でないのに何故、この坂が出てくるのか、「根国」の解釈とかかわって迷わすことになる。根国と黄泉国は同じだとする解釈はうけいられない。異なる呼称をもっているように、異なる世界とすべきである。

八十神の迫害をさけるために、スサノヲのいる「根之堅州国」に逃れたオホナムヂは、生太刀・生弓矢・天沼琴を持ち、妻のセセリビメを背負ってその国を脱

出する。スサノヲは「黄泉比良坂」まで追ってきてオホナムヂ（のちのオホクニヌシ）に祝福の言葉をおくる。

これがオホナムヂの「根国」訪問神話の大筋である。イザナミが「黄泉比良坂」まで追ってきたように、スサノヲもこの坂まで追ってきて、この坂をこえていない。イザナミが「黄泉津大神」として「黄泉国」の大神になったように、スサノヲも「根国」の大神になった（「スサノヲノ命の坐せる根堅州国に参る向ふべし。必ずその大神、議らむ」とある）。

古事記の「根国」は、海原を知らすよう委任されたスサノヲがその国を治めずして、

①「僕は妣が国根之堅州国に罷らむとす」と答えた」とある初出例と、さきのオホナムヂの根の国訪問神話の中に、

②「スサノヲの命の坐せる根堅州国に参る向ふべし。」とある二例だけで、この「根（之）堅州国」という表現は古事記独自のものである。

「根国」について、古事記伝は、「根とは、下つ底に有ル故に云フ（中略）此ノ根ノ國と云は、即チ黄泉國のことなり」と、「黄泉国」と同じであるという。『時代別国語大辞典・上代編』が、「死後の世界。地の下にあると考えられ

ていたようである。」としているのも記伝以来の解釈であるが、この国を地下の世界とすることについては、古事記の表現にそれを認めることはできないとする見方もある。

日本書紀は、第五段から第八段にかけて十一例の「根の国」を数える。いずれもスサノヲに關するものである。

①「汝、甚だ無道し。宇宙に君臨たるべからず。固に當に遠く根の國に適ね。」(第五段本文)

②素戔嗚尊は是性残ひ害ることを好む。故、下して根の國を治しむ。(同段一書第一)

③「汝此の國を治らば、必ず残ひ傷る所多けむとおもふ。故、汝は、以て極めて遠き根の國を馭すべし。」(同段一書第二)

④「吾は母に根の國に従はむと欲ひて、只に泣かくのみ。」(同段一書第六)

⑤「吾、今教を奉りて、根の國に就りなむとす。」(第六段本文)

⑥「父母已に厳しき勅有りて、永に根の國に就りなむとす。」(同前)

⑦諸の神、素戔嗚尊を嘖めて曰はく、「汝が所行甚だ無頼し。故天上に住むべからず。亦、葦原中国にも居るべからず。急に底根の國に適ね」といひて、乃ち共に逐降ひ去りき。(第七段一書第三)

⑧「吾、更に昇來る所以は、衆神、我を根の國に処く。今當に就去りなむとす。」(同前)

⑨「當に衆神の意の隨に、此より永に根の國に帰りなむ。」(同前)

⑩已にして素戔嗚尊、遂に根の國に就でましき。(第八段本文)

⑪然して後に、素戔嗚尊、熊成峯に居しまして、遂に根の國に入りましき。(同段一書第五)

古事記の①の「根國」、②の記事にあらわれる「黄泉比良坂」という表現から「根國」に「黄泉國」のイメージが揺曳していることは否定することはできないが、①の「妣」を亡き母と断定することには無理があらう(拙稿「『妣』の用法」『古事記の表現論的研究』所収)。日本書紀の用例④に「母於根國」とある母についても、

この「母」は一般的な言い方で、必ずしも伊弉冉尊をささない。素戔嗚尊は伊弉諾尊の禊ぎから生れたからである。(新全集、頭注)

ということにならう。

「根國」の空間的位置は、②に「遠く逃げたまひき」とあり、④に「固に當に遠く」、⑥に「極めて遠き」などどあるように、「極遠」のところであったこと、さらには⑦が「底根の國」といっていることによれば(これは大祓祝

詞の「根の国底の国」に通じる表現)、地の底にあると考  
えられていたことを示していることになる。〈根国〉を  
〈黄泉国〉と同じく、地下の世界とする解釈が一般的であ  
るが、〈根〉の原義をどのように解するかによつて意見は  
二分されている。

「根之堅州国」はスサノヲが希望した国であり、またア  
シハラシコヲが八十神の迫害をさけるために行き政治的宗  
教的支配権を獲得した国であつて、〈負〉のイメージは認  
められない。これが〈根国〉観であろう。

ところが日本書紀の〈根国〉は、無道・残酷・乱暴なス  
サノヲを放逐する極遠の国として設定されており、スサノ  
ヲは父母の勅命や諸神の噴めを受けてこの国に赴くことにな  
っている。〈根国〉を海の彼方の楽土とする説もあるが  
日本書紀の〈根国〉は理想郷とはいえないであろう。

「妣国」は、古事記上巻の三例のみで、独自の表現。

①故、伊耶那岐大御神、詔速須佐之男命、「何由以、  
汝不<sub>レ</sub>治<sub>レ</sub>所事依<sub>レ</sub>之國<sub>上</sub>而哭伊佐知流。」尔答白「僕者  
欲<sub>レ</sub>罷<sub>レ</sub>妣国根之堅州国<sub>上</sub>故哭。」

②尔速須佐之男命答白「僕者無<sub>レ</sub>邪心」。唯大御神之命以、  
問<sub>レ</sub>賜僕之哭伊佐知流之事。故白都良久「僕欲<sub>レ</sub>往<sub>レ</sub>妣  
国<sub>上</sub>以哭。』……」

③故、御毛沼命者、跳<sub>レ</sub>浪穗、渡<sub>レ</sub>坐于<sub>レ</sub>常世国、稻水  
命者、為<sub>レ</sub>妣国<sub>上</sub>而、入<sub>レ</sub>坐海原也。

①と②はひと続きの神話。③は巻末の用例。〈妣国〉は語  
義からいえば亡き母のいる国ということになるが、母のい  
る異界と解した方が適當であろう。③は母の国として異界  
(海原・海神の国)にお入りになったというのであろう。  
タマヨリビメの国が現し国とは異界の海神の国であること  
を示唆する表現として〈妣国〉という独自の表現を案出し  
たものと考えられる。

〈常世国〉について、宣長は「たゞ何方<sub>ノ</sub>にまれ、此ノ皇  
國<sub>ニ</sub>を遙<sub>ニ</sub>隔<sub>リ</sub>離<sub>レ</sub>れて、たやすく往還<sub>ガ</sub>たき處<sub>ヲ</sub>を泛<sub>ク</sub>云名な  
り、故<sub>レ</sub>「常世は借字にて」名ノ義は、底依國<sub>ニ</sub>にて、たゞ  
絶遠<sub>キ</sub>國なるよしなり」といつている。名義については疑  
問であるが、不老不死の理想境と考えられていた、海上彼  
方に存在する異界であつた。例えば、ミケメの命は「浪の  
穂を跳んで常世国に渡つた」とある。

ところで、異界として〈海原〉がある。三貴子分治のと  
ころで、古事記では、スサノヲが〈海原〉を治めるように  
委任されたが〈海原〉を治めず〈根国〉に赴き、その国の  
大神になったとある。この〈海原〉が再び登場するのは上  
巻の巻末である。

平定された葦原中国に天降つたホノニニギの御子ホヤリ

(山幸彦) は海神の娘トヨタマヒメと結婚することによつて海の靈力を獲得した。ホヲリの孫の一柱イナヒは(妣国)として(海原)に入った。三貴子の分治においてスサノヲが拒否した(海原)である。スサノヲの支配領域の変更に、皇孫イナヒが主宰神になる異界として構想されていたからであろうか。

〈高天原〉は冒頭三神・別天神五柱・神世七代を経て皇祖神アマテラスが常住する天上世界として設定された空間であった。〈高天原〉という呼称は地上からの命名である。この〈高天原〉と向い合う世界が(葦原中国)でこの世界も〈高天原〉からいえば異界といえなくもない。先住神オホクニヌシの国作りや国譲り、天孫ニニギの降臨を経て実体化していく世界である。〈高天原〉は葦原中国以外と関係することはないが、一方の(葦原中国)はすべての異界と繋がりをもつ中心に位置する空間であった。この(葦原中国)と異界とのかかわりの一面を表で示すと次のようになるであろう。

異界を訪問した神の存在が神話の進展において顕著な役割を果たしていることは説明を要しない。ミケヌが(常世国)、イナヒが(海原)の主宰神の位置についたかは記述されていないが異界のそれぞれの国にその国を主宰する神

異界	主宰神	先住神	訪問神
黄泉国	伊耶那美命 (黄泉津大神)	黄泉神	伊耶那岐命
根(之)堅州国	湏佐之男命 (大神)	「妣」	大国主神
常世国	御毛沼命	少名毘古那命	
海原	稻氷命	海神・「妣」	日子穗々手見命

が配置されていることからみて、皇孫を異界の主宰神に据える構想があったものと考えられる。毛利正守氏は、「かかる異界は、葦原中国を中心として立体的な広がりの中で意識的に構想された世界であり、古事記が語る神話のいわば宇宙観を示顕していると言つてよい。」(「古事記構想論」『古事記の現在』所収)といわれる。

天地開闢―キミ二神の国生み・神生み―イザナキのヨミの国訪問―三貴子誕生―オホクニヌシの根の国訪問―国作り・国譲り―天孫降臨―ホホデミの海原訪問―日向三代という骨子をたどつても知られるように異界訪問の神話が節々で語られていて、異界の存在が古事記神話を成り立たせているといつてもよいであろう。天孫の支配する国土が天つ神や天孫の主宰する異界によつて支えられているという在り方である。

古事記は「文字」によつて構成された情報である。しかし、各階層の不特定多数に伝達することを前提にして作成されたものとは考えられない。「異界」についても、特定の支配者層や知識層に属する者への情報であり、異界観の表現であつたといえるであらう。

(平成十二年五月稿)